

武蔵野大学学術機関リポジトリ Musashino University Academic Institutional Repository

# 来し方を振り返りつつ仏教の未来を考える

著者	高橋 審也
雑誌名	The Basis : 武蔵野大学教養教育リサーチセンター 紀要
号	4
ページ	17-28
発行年	2014-03-01
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1419/00000127/">http://id.nii.ac.jp/1419/00000127/</a>

## 来し方を振り返りつつ仏教の未来を考える

高橋 審也

### 1. 武蔵野大学での思い出

私は武蔵野大学で、1998年から専任として仏教の講義を今日まで続けて来た。それ以前の非常勤の時代を合わせるとほぼ20数年間本学にお世話になったことになる。振り返って見るとこの期間に時代は大きな変化を遂げたが、本学も1学部的女子単科大学（厳密には文学部と短期大学部）から、多くの学部を擁する男女共学の総合大学へと発展して今日に至っている。キャンパスもまた、武蔵野校舎1キャンパス体制から、有明校舎が新たに設立され、2キャンパス体制となった。これほどに目まぐるしい変化を遂げた大学も他には珍しいのではないと思われるほどである。それにつれて学ぶ学生の気質も以前とはかなり大きな変化をしているように思われる。しかし、これは学校の変化に連れてというよりも、それを取りまく社会の変化の結果と云った方がよいであろう。それぞれの大学に所属する学生の個性に幾ばくかの違いがあったとしても、それよりも、2013年という現在において、現在の日本中の大学生に共通する問題点、課題というものがあるように思われる。

私が常勤として赴任したのは本学に現代社会学部が設立された1998年であった。その時に本学が総合大学化の道を歩み始めたのであった。正確には、その直前に文学部の中に人間関係学科が設立されたのが出発点となった。人間関係学科は後に学部として独立することになるが、本学総合大学化の端緒はあくまでも現代社会学部の設立にあった。現代社会学部設立の意趣は「現代の社会学」を学ぶ学部ではなく、「現代の社会」を学ぶ学部というところにあった。学部は「現代社会学科」と「社会福祉学科」の2学科よりなる。現代社会学科は政治・経済・法律・社会等を総合的に学ぶことの出来る学科であり、社会福祉学科は社会福祉を学び、特に社会福祉士を養成することを主目的とする学科である。

私はこの学部で本学建学の精神である仏教を講義することが主な役割であったが、社会福祉学科の所属となったので、社会福祉学科の学科会議に参加することとなった。初代の学部長は潮木守一教授、現代社会学科学科長は高村壽一教授、社会福祉学科学科長は川村匡志教授であった。教員は各方面から人材を集めて構成されていたが、なにしろ、何も無いところからの出発であったので、教員も学校側も事務方も、要領もよく分からず手探りからの出発であった。しかし、新学部の設立、出発ということで、教員・事務方全員がそれぞれ意欲をたぎらせて、協力しながら手づくりのようにして、学部を完成していったように思われる。

その熱心さが嵩じて先生同士の軋轢などもよく見られたが、これも生みの苦しみのひとつと考えれば、現在では反って懐かしく思われる。私もこの学部時は仏教のみならず、一般科目やゼミ・卒業論文を担当したことは充実した日々であった。現代社会学部の設立は当時としては非常に斬新で時代の先端を行くものであったので、他にも真似る大学が幾つかあった程である。しかし、現在現代社会学部が消滅してしまったことは当時を知るものにとっては

残念な思いを禁じえない。このような思いをしている人は私一人ではないように思われる。

私はその後、折から新たに設立された看護学部配属されることになった。看護学部ではオリエンテーションキャンプ等の懐かしい思い出があるが、殆どの学生が看護師になるための国家試験を目指し、カリキュラムもそのために編成されているので、仏教の教員の関わる幕は殆どなかったといってよい。その中に建学科目は武蔵野ベースという教養科目の一環として組み入れられ、担当教員も教養教育所属ということとなって今日に至っている。

私は現在まで建学科目（仏教）担当として、学生に仏教の教えの真髄を残りにくく伝えられたかといえば、内心忸怩たる思いを禁じえない。学祖である高楠先生や仏祖たる釈尊や親鸞聖人に申し訳ないという気持ちで一杯である。

私が大学生に仏教を教え始めてから、現在に至るまで、痛感するのは、現代の若者に「仏教」を教え理解させるということが、いかに困難なことであるかということである。武蔵野大学の学生でいえば、殆どの学生が中学や高校で、宗教・仏教について何も学ぶことも無く、何の予備知識もなく、入学していきなり難しい仏教的テクニカルタームや思考方法に出くわすと、大きなカルチャーショックというより、カルチャーギャップに襲われることになる。さらに東京を中心とする首都圏（現在の本学の学生の多くは首都圏出身である）は全国的に見ると、他の地域と比べて相対的に仏教・宗教不毛の地であり、恐らく各学生の家庭における宗教的・仏教的雰囲気は一部を除けば、極めて希薄なものであろうと想像される。

そのような環境にある学生達に、特に高校を卒業したばかりの何の仏教・宗教に全く予備知識のない新入生に仏教を理解させようとすることは至難のわざであることは残念ながら事実である。むしろ、本学の中高から進学して来た学生はむしろのこと、他の浄土真宗系や浄土真宗系ではない他の仏教系の高校から進学して来た学生、彼等は授業で「宗教」を学んで来ているし、学校に於いて「礼拝」の行事があつたで、余り抵抗感がなく仏教の授業を受け入れることが出来る。さらにミッション系の学校でキリスト教を学んだ学生の方が、仏教・宗教に全く無縁のままで入学して来た学生より、仏教の授業に素直に馴染むことが出来るように思われる。

それ故に、仏教を教える教員としての私にとって、この二十年間は仏教というものをいかに現代の若い学生達に伝えていくべきかということに悩みながら悪戦苦闘した年月であったといっても過言ではない。これは一面では教員としての能力不足といわれても甘受する以外にはないが、もう一つには仏教というものがインドで発生以来、今日に至るまで約 2500 年の歴史を経る過程で広大な間口と深遠な奥行きを持ち極めて多様性かつ柔軟性に富んだ思想・宗教であるということに由来するものである。そして、そのことが世間的な仏教に対する正確な認識と理解とを妨げて来た所以でもある。

しかし、このような仏教の有する多様性柔軟性そして、その思考方法こそが、キリスト教やイスラム教などのそれと対比すべきオルタナティブな宗教思想としてこれからの世界において貢献し得るものではないかとも考えられるのである。

今回は偶々紀要に執筆する機会をいただいたので、そのことについていささか、エッセイ風に私自身の来し方を振り返りながら、考えて見たい。

## 2. 学生時代とマルクス主義の全盛

私の故郷は群馬県前橋市で現在もそこに住んでいる。かかあ天下と空っ風で有名な上州の地である。生まれたのは浄土真宗の寺の次男としてであった。次男といっても、長兄が生まれて間もなく亡くなったので、実質的には長男といってもよく、必然的に寺の跡取りということになる。

寺の跡取りとして生まれ成長したものにとっては云うに云われぬ悩みというのが、心の奥底に重石となって、沈殿しているものだが、私も例外ではなかった。寺の子で友達には「坊主」とか「小僧」とか「坊主丸儲け」とからかわれた経験の無いものはいないであろう。しかし、生まれつき呑気な性格であったためか、自分の未来について、真剣に悩むなどということもなく成長していった。寺の子であったから、毎日お経を読んだりすることを除けば、一般の子とは殆ど変わらない生活であったと思う。

しかし、高校を卒業して大学（東京教育大学）に入学するとそれまでの生活環境とはガラッと変わった。まず、自宅から離れて、渋谷区の千駄ヶ谷に下宿することになった。眼の前は国立競技場であり、時まさに東京オリンピックの頃であった。マラソンでアベベが先頭を斬って走って来るのを見るという奇遇にも恵まれた。何よりも親元を離れて一人で暮らすという開放感が何よりだった。一人で淋しいとかホームシックなどは一切感じなかった。

しかし、入学して驚いたのは学生運動の盛んなことだった。これは私の大学だけが特別だったというよりも、当時の国公立大学、私立大学共通の状況であったかと思われる。

私の友人も多く、学生運動に参加していった。学内にはセクトも三つほどあって、お互いに激しく競合対立していた。しかし、その頃はまだ内ゲバなどということはなかったと記憶する。自分もまた、友人に誘われてデモや集会に参加したこともあった。また、当時、大学の筑波への移転計画が持ち上がって、学生のみならず、教員をも含んで、学内は騒然とした雰囲気包まれていた。

しかし、そのような状況にあって、自分自身どこかしっくりしない違和感が、友人達のようにのめり込まないで、学生運動に距離を置いた所以であったと思う。

その違和感の根拠は私自身が寺に育って、仏教的雰囲気の中で育ったということが影響しているといってもよいかも知れない。私の両親はあの当時のごく平均的な日本人の意識を有していた。思想的にも、保守的であって、左翼思想は好まなかったであろう。しかし、戦前、寺の境内に長屋があって、その住人の若者が、左翼運動で特高警察に何回か捕まって留置されたとき、保証人となってもらい下げにいったこともあったというから、イデオロギー的な左翼嫌いではなかったと思われる。

両親は住職と坊主（住職夫人）として信仰の面でも、極めて篤く敬虔なものがあつた。浄土真宗の寺には門徒あるいは檀家といわれる人々が日常的に出入りしていたが、門徒に対しても居丈高にふるまったり、教権的に対したりすることは決してなかつたように思われる。親鸞のいう御同行・御同朋の精神が、二人の中に生きていたのではないかと思われる。また、門徒は概ね一般の民衆で、「庶民」とも称されている人々であつたので、彼等の心性・メンタリティも自然に理解出来るようになった。

このような環境に育って、一人東京で学生生活を送りつつ、ノンポリとして学生運動の狂騒の中に身を置いて見ると、この二つの世界のギャップの大きさに戸惑わざるを得なかった。

学生運動は多くのノンポリ学生をも巻き込んだものであったが、その中核を担ったのはマルクス主義の政党や組織であった。第二次世界大戦後、昭和 20 年代から、40 年代にかけての日本はマルクス主義全盛の時代であった。唯一戦争に反対し、最終的に節を曲げなかった人々として共産党の幹部は刑務所から出所すると、まるで英雄の凱旋のように迎えられた。知識人も、自分達が戦争に最終的に抵抗出来なかったというコンプレックスからか、左翼政党に身を託す人が輩出したのであった。当時の論壇は殆ど進歩主義知識人によって占拠されて、進歩主義にあらずんば人にあらずという風潮であった。ただ不思議なことには国会の多数派は一貫して保守勢力であって、社会・共産などの左翼政党は 1/3 の勢力を超えることはなかった。

しかし、マルクス主義、社会主義こそ世界や日本の未来を担う旗手であるという認識は特に知識階級を中心に長い間共有されることとなった。高校時代の同級生はその当時のソ連について「ユートピアのような国だよ」と得々として話していたのを今、思い起すが、このような認識を有していた人は当時決して少なくはなかった。さらに戦争に反対し平和を希求する社会主義こそが世界の平和を最終的に実現しうるものであると考えられたのである。

このような社会主義に対する期待は時代を経るにつれて、徐々に幻滅に向かっていった。特にハンガリー動乱、チェコ事件、中ソ対立、ソ連のアフガニスタン介入、ビロード革命、ベルリンの壁の崩壊、続くソ連を始めとする社会主義政権の崩壊によって世界におけるマルクス主義の権威は完全に消失してしまった。この社会主義幻想の崩壊について、ある西欧の識者はこの事態は世界にとって「決定的」な意味を有していると語っている。それはマルクス主義社会主義思想が有していた「正義の形而上学」とでもいうものが、もはや有効性を持たないということが明らかになった結果、ニーチェがかつて「神が死んでニヒリズムが到来した」と叫んだことと同じような状況がこの現代世界に出来たということなのである。我々はもはやマルクス主義的正義である「平等・平和・公正」などを額面通りには期待することは出来ない。ある意味では良心的であろうとする人々に正義を実践せしめようという力を与えていた一つの観念がその実効性を失ったということなのである。

マルクス主義の崩壊によって、その後に出現したのは「自由競争原理」「市場原理主義」という優勝劣敗・弱肉強食という世界であった。これは「強い者が勝ち、弱い者は負けて当然」という思想であって、これは根底においてニヒリズムを基盤としたものである。このような市場原理主義の跋扈が日本を含めて世界的に格差社会を生み出し、リーマンショックなどの経済危機を生ぜしめたのであったが、その背景にはこのような社会主義の崩壊によるニヒリズムの現出という事態があったのである。

### 3. キリスト教とマルクス主義——二元論的思考

私が学生運動の狂騒のさなかに、運動の思想的基盤であったマルクス主義に違和感を持った理由は、それが平和を希求する思想といいながら、根本においては暴力性をはらんだ思想



ではないかということであった。マルクス主義によれば資本主義は少数のブルジョワジー（資本家）が大多数のプロレタリアート（労働者）を搾取するという構造において成り立っているものである。資本主義国家というものはブルジョワジーの階級支配のための道具に過ぎない。諸国家は資本の欲望を満たすために必然的に帝国主義となって、互いに衝突する。資本主義国家間による帝国主義戦争は必然的である。それを防ぐためには資本主義体制を倒して、プロレタリアートによる社会主義革命を実現しなければならない。そうすれば、戦争のない平和な世界が永久に実現するというものであった。

それは絶対善なるプロレタリアートと絶対悪たるブルジョワジーの対立において世界の有り様を眺めてゆこうとするものである。これは思想的にいうと唯物論（善）と観念論（悪）との対立でもあった。マルクスの盟友であったエンゲルスは唯物論と観念論は絶対相入れないものであり、二つの思想の間は二種択一であって妥協は有り得ないと言っている。これは、いわば一種の善悪二元論であり、白黒主義であるといってもよい。要するに善と悪、白と黒の間に妥協があってはならないのであり、その間にグレーゾーンも存在してはならない、ということになる。我々にとって善でも悪でもない、白でも黒でもない立場に位置することは認められないということになる。正統的なマルクス主義において修正主義というものが特に嫌われた所以にはこのような背景があった。

マルクス主義のこのような特徴はキリスト教から受け継いだものとも考えられる。マルクスは代々ユダヤ教のラビの家系でキリスト教に改宗した家柄であった。造物主であるヤハヴェは絶対神・超越神であり、全知全能である故、被造物たる人間は絶対善である神の命に従わなければならない。いささかでも神に従わなかったり、そむいたりすることは許されることではない。神に従わないということは神を裏切ることになるから、絶対悪であり、いずれやって来るであろう最後の審判時において厳しく罰せられるのである。マルクスの思想にはこのようなユダヤキリスト教的なメシアニズムが根底に存在していると思われる。

マルクス主義の歴史観は原始共産制（ユートピアの時代）・古代奴隷制・中世封建制・近代資本主義・共産主義の順に進展して行くと考えられている。資本主義体制が打倒され、それまでの階級社会が消滅して、共産主義というユートピア社会が実現して、歴史は終焉を迎えるということになる。これはユートピアであるエデンの園に住んでいたアダムとイヴが禁断の木の実を食べることによって原罪をおかし、楽園を追われ（失楽園）て以来、人類の苦難の生活が始まる。神は人類の苦難を救済するために、イエスを神の子として派遣する。イエスは神の福音を説き続けるが、イスラエルの民の受け入れるところとならず、訴えられたイエスはゴルゴダの丘において十字架の刑に処せられるが、三日後に復活したと信ずる人々によって、キリスト教が成立し、ローマを拠点として世界中に勢力を拡大するということになる。

しかし、やがて未来世界の最後において神と敵との激しい戦闘（ハルマゲドン）が繰り広げられ、最終的には神の勝利に帰して、イエスが再臨して神の栄光の国が出現する。そこにおいて世界の歴史が終焉をむかえるということになる。

マルクス主義の歴史観がこのユダヤ・キリスト教の歴史観を受け継いでいることは明らかであろう。そして、この思想の善悪二元論的構造はグレーゾーンを認めないことにおいて、極めて暴力性をはらんでいる。現実世界に現存した社会主義国家、ソビエト連邦・中華人

民共和国を始めとする諸国家がことごとく一つの例外もなく、言論の自由などまったく認めない強権主義的な国家であったのも、実質的に国家運営を執行する前衛政党が神に委ねられた？絶対正義を執行する神聖なる存在と考えられていたからである。

#### 4. ドストエフスキーに出会う

私は大学時代からドストエフスキーやトーマス・マンなど欧米の文学に沈溺したことがあった。特にドストエフスキーには多大な影響を受けた。私は仏教的環境にいたから、キリスト教には余り興味は持たなかった。しかし、ドストエフスキーだけは別だった。ドストエフスキー的キリスト教ならば信じてよいとまで思った。事実、日本の文学者で例えば椎名麟三などはドストエフスキーに牽かれてキリスト教徒になったといわれている。

『カラマーゾフの兄弟』『悪霊』『罪と罰』『白痴』『地下生活の手記』などどれをとっても圧倒的な迫力をもって読者に迫ってくる。特に『カラマーゾフの兄弟』には善も悪も正義も邪悪も罪も罰も総て背負って生きている深遠な人間の姿を余すところなく描いて、強烈なインパクトを与える。イワン・カラマーゾフが、弟のアリョーシャに説く「大審問官」の場面はいうまでもなく、特に印象に残っているのはゾシマ長老の死後、偉大な聖者であるはずの長老の遺体から悪臭が漂って来るところ、さらには、小説の最終の場面であったと記憶するが、子供たちがカラマーゾフ家を訪ねて、帰りの道すがら、揃って「カラマーゾフ万歳」と叫ぶ場面であった。この「カラマーゾフ万歳」という子供たちの叫びは、いわば「人間万歳」といっていることと同じであると思う。ドストエフスキーは善も悪も正義も邪悪も総て一身に抱え込んでいる人間がそれであるからこそ素晴らしい存在であり、それであるからこそ神はそのような人間を究極的に愛するのであるといっているのだと思う。

『悪霊』においては、正義の執行者として行動しようとした革命家が、結局暴力の執行者として振舞ってしまうという逆説を見事に明らかにしている。

こう見てくると正義の執行者として、最大限 700 万人の人間を虐殺粛清したといわれるスターリン治下のソビエト連邦でドストエフスキーが禁書になったということはよく、納得出来るところである。

以上のようにキリスト教やマルクス主義について批判的な言辞を縷々述べてきた。人によってはこれを見て私のことを極端な保守主義者、反共主義者あるいは一昔前によく使われた保守反動という言葉で難じるかも知れない。しかし、ここで問題とするのはマルクス主義というよりマルクス主義的思考方法なのであって、それはそのまま、右であれ、左であれ、善悪二元論的傾向を有するあらゆる思想に当てはまるものとする。ファシズムや戦前の日本の軍国主義にも当てはまる。また、現在の政治状況にも危惧を感じている。

であるから、現在のキリスト教における他宗教との融和主義的な態度や現在の日本共産党の政策を批判しているのではない。ただ、以上のようなキリスト教やマルクス主義の過去はしっかりと総括反省されるべきであると考えます。

以上、マルクス主義についての違和感を述べてきたが、右であれ、左であれ、いわゆる善悪二元論的思考というものが、きわめて暴力性をはらんだものであることは間違いない。今

から十二年前、2001年9月11日にアメリカ合衆国のニューヨークで起きたアルカイダによる9.11テロによって、マンハッタンに屹立する世界貿易センタービルのツインタワーはもろくも崩壊した。これはアメリカ人にとってはいうまでもなく、世界中の人々にとって大きな衝撃を与えた驚天動地の経験といってもよい。その後、当時のアメリカ大統領ブッシュは「これは正義と邪悪との戦いである。世界の人々は正義につくか、邪悪につくか、どちらかを選ばなければならない」と演説した。この翌年、アメリカ軍はテロの首謀者とされるオサマ・ビン・ラディンが居るといわれるアフガニスタン攻撃を開始し、翌々年はイラク大統領サダム・フセインが9.11テロを背後から操っていたとし、更には大量破壊兵器を貯蔵していると主張して、国連決議もなされないまま、イラク戦争を開始したのであった。

ブッシュの発想は典型的な善悪二元論であり、アメリカの識者はそれをマニ教的善悪二元論と呼んでいる。ブッシュの背後にいたのはネオ・コンサーヴァティヴ略してネオコンと称される集団であり、もとはトロツキストでそれが反ソ・反スターリン左翼の立場から転向して、保守派になったもので、従来の保守派と異なるのでネオコンと称される。彼らの主張は正義を体現しているアメリカ的民主主義を武力的手段によってでも、世界中に拡めることを、正当化しようとするもので、トロツキーの永久革命論、世界同時革命論を裏返しにしたものであるといってもよい。ネオコンにとって、アメリカ的民主主義こそが絶対正義であり、そうでない非民主主義的な体制は武力的手段によってでも、崩壊させなければならないというもので、典型的な善悪二元論であり、また、それゆえ極めて暴力的なものであった。ネオコンのメンバーはいずれも、アメリカの軍需産業の周辺に巣食っているといわれるのも、彼らの軍事重視の姿勢によるものである。

## 5. 市場原理主義——ニヒリズムの出現

さて、長い間世界中の「良心的」知識人を支配して来たマルクス主義がベルリンの壁の崩壊に始まる社会主義国家の相次いだ消滅によって、その有効性を失った時、それに代わって出現し世界を席捲したのが、「自由競争原理」「市場原理主義」といわれるものであった。正義・平等などの理想の実現という高邁な夢を幾分かでもその中に含んでいたマルクス主義に対して、利益の獲得というものを最高目的とする市場原理主義は何とも索漠としたものであった。東西冷戦の真っ只中にあって、アメリカは自らの制度を「自由主義体制」と称して決して「資本主義体制」とは云わなかったと記憶する。それが社会主義諸国の崩壊が実現したとたんに「資本主義」の優位性を露骨に誇るようになった。しかし、市場原理主義が、世界を覆いつくすことによって、それに伴う貧富の格差拡大、社会の人心の荒廃は世界的なものとなったのである。ソビエト連邦が崩壊後のロシアに出現した甚だしい社会の混乱は、ロシア国民を失意のどん底に陥れるものがあり、現在のプーチン政権の強権ぶりが、それでも、社会の安定を望む国民多数に支持されている所以であるといわれる。

世界を覆う「市場原理主義」はリーマンショックによる世界同時経済危機という大きな代償を払ったにも拘わらず、あたかも、それ以外の道はないかのように、世界中を席捲している。わが国では30年以前の大学アカデミズムにおいては、特に国公立大学ではマルクス経



経済学が全盛であった。ところが、現在ではマルクス経済学は見る影もなく、わずか30年の経過でハイエクやフリードマンなどの市場原理主義に基づくアメリカ由来の経済学が主流となるという著しい変転ぶりを見ると、学問におけるディシプリンに対する信頼性が揺らぐのは当然のように思われる。

リーマンショックの頃NHKのテレビでフランスの放送局が製作した番組があった。この経済危機をどう見るかということを各方面の経済人に問うというものであった。その中で旧東ドイツ政府の幹部が、リーマンショックに現れた市場原理主義の失敗をあげつらって、社会主義経済の優位性を説くのに対して、アメリカの投資金融会社の有能なトレーダーという人が出演して、社会主義国家の失敗をあげつらって、市場経済の優位性を説いていた。いずれにおいても市場経済と社会主義経済の二項対立のみしか眼中にないということに変わりがない。もし、我々の未来がこの二項のみの選択肢しかないというのであれば、ある意味では人類の未来は絶望的と云わなければならない。

## 6. 仏教は第三の道を示しうるか？

このような状況にあって仏教思想が、ユダヤキリスト教的（イスラム教的）あるいはマルクス主義的な二元論的ではない、そして、アメリカ的な優勝劣敗を殊とするニヒリズムを内にはらんだ自由競争原理ではない第三の道を指し示すことが出来るのかどうか少し考えてみたい。

本武蔵野大学の創業者である学祖高楠順次郎博士は、自らの仏教観を披瀝して次のように述べている。

仏教は自己の人格修養のほかになにもなく、祈るべき神も存在しない。自己を助けるべき神をどこにも求めない。自己の運命は自己が開拓すべきものであって、人生は自業自得の結果である。人類をつくりだす神は存在しないという、自己の修養一点ばりの宗教である。われわれが仏に成り、仏と同じ大自覚をうと言うのが、われわれの最大の目的であり、造物主、万物創造の神を全く認めないのである。

倫理も哲学も宗教も、みな人の性格の向上性である。仏教は徹底的の人格向上主義である。人格向上の目的より他に仏教というものはないのである。普通人格たるわれわれ凡人位から、超人格たる菩薩位を経て、絶対人格たる仏位に至るまで向上し尽くすのであるから、仏教は徹底的人格向上の教義である。他の宗教は多くは神となることは許されない。仏教は仏と成ることがその目標である。唯一の徹底的人格向上である。あるいはこれを自己創造の教えといい得る。

このような高楠博士の仏教観については当然異論があるかも知れない。「人格修養」とか「人格向上」という表現で、仏教の覚りへの道を表すということについては抵抗があるかも知れない。また、明治から大正にかけて、特に当時の知識人の間に顕著だった人格主義の影響が見られることも事実である。しかし、高楠博士が伝統的な仏教的述語をあえて避けて、

このような表現をとったのには、仏教と折から欧米から流入したキリスト教との違いをはっきりと際立たせようとの意図からであったと思われる。博士がここでいう「祈るべき神も存在しない」「人類をつくりだす神は存在しない」というのが後の文脈からして「造物主」「万物創造の神」であるキリスト教の神であることはいうまでもない。

造物主であるキリスト教の神は被造物である人間や動物たちとは全く異なり、隔たった存在であり、神と被造物の間にはいささかの共通性同一性は存在しない。被造物は神の命にひたすら順わなければ成らないのであって、人間が神をまねて神に近づこうとしたり、神を裏切ろうとしたら、神は怒りをもって、人間を罰するのである（バベルの塔、ノアの箱舟）。

それに対して仏教でも、迷い苦しむ存在である衆生（いのちを有するもの）は最高人格である仏陀とは全く隔たった存在ではある。しかし、両者は全く隔たった存在であるにもかかわらず、断絶しているものではない。衆生は気の遠くなるような時間をかけてでも、自己を向上させることに努めて、自己の人格を完成し、仏陀となるべき存在なのである。

ここに仏陀と衆生とは全く隔たった存在であるにも拘わらず、全く断絶したものではなく、同質の基盤の上に存在するものということになる。この点を特に強調するのが、「一切衆生悉有仏性」という如来蔵思想である。しかし、そうでない他の仏教各宗派であっても、衆生が仏陀になることを最終の目的地とする限り、両者は連続性を持っていることには変わりがない。親鸞のように阿弥陀如来の絶対他力を強調する思想でも、覚りを得て仏陀になることを目指す限り、連続性を有していることに変わりはない。

弥陀の本願信ずべし 本願信ずるひとはみな 摂取不捨の利益にて 無上覚をば覚るなり 正像末和讃

さらにいえば、この仏陀と衆生の関係は基本的には上下の関係ではなく、平面の関係であると思われる。キリスト教では神は被造物の上に君臨する存在であり、神と人間とは上下の関係にあり、この関係は絶対的であるからだと思なしていたからである。人間が天に高く積み上げて行って、自らに近づいて来たバベルの塔を神が破壊してしまったのも、神と人間との間にある上下なる絶対的秩序を転倒することを許さなかったからに他ならない。

## 7. 仏教における水平的構造

それに対して仏教において仏陀と衆生の関係は同一平面上における関係である。仏教の本質は智慧と慈悲であるといわれるが、仏陀もまた智慧と慈悲を完成した方といわれる。智慧はすべての現象をありのままに見ることのできる智慧であるといわれる。凡夫である衆生は自己中心的に物事を見て行くから、自己と他を分別して、対象を差別的に見てゆくことになる。それに対して仏陀は自己と他を区別なく差別なく平等に見て行くから（自他平等）、慈しみ共感（悲）の心をもって、衆生に対する慈悲となって発現する。これは自他平等の慈悲（選択集）といわれ、自と他を平等に見てゆこうとする態度であるから、上下の関係ではないのである。釈尊が信仰を有する衆生を「親友」とか「勝友」と呼ぶ（無量寿経）

のも、仏陀と衆生との平等な関係を表している。

これは仏教教団（僧伽）の形態を見ても明らかである。現代の我々は教団といえば、ピラミッド的形態をとった組織を思い浮かべるかも知れない。頂上に組織の長がいて下部に向かって指揮命令を下すという組織形態である。しかし、本来の僧伽はそのような形態は取らない。僧伽は世俗から独立した組織であり、世俗の価値観には従わず、世俗の権力からも干渉されない。僧伽の構成員はすべて平等であり、そこにはピラミッド的な上下関係は存在しない。成員は男性（比丘）であれば二百五十戒、女性（比丘尼）であれば三百六十戒の波羅提木叉の条項を護持することが義務づけられる。かろうじて法臘という「出家し、具足戒を受けて比丘・比丘尼となった以降の年数の長い者」が長老して尊ばれる。これが僧伽における唯一の秩序維持の手段である。僧伽の成員は皆平等であるから全員が同じ色をした衣をまとう。南方上座部であれば黄色、チベットであれば栗色など、すべての僧が例えばダライラマのような最高位の僧であっても同一色の衣をまとうのである。位階によってまとう衣の色が異なるという日本仏教の状態は本来の有り方からすると異常であるといつてよい。

ベルギーが生んだ偉大な仏教学者であるエティエンヌ・ラモート（カトリックの神父でもある）が仏教が教権主義的な教団形態を有しなかったということがインドにおいて仏教が減びてしまった最大要因であると仏教のために惜しんでいるが、このような事態は二元論的思考を採らず縁起的思考方法を採用する仏教思想から由来しているといつてもよいであろう。

要するに仏教思想においては善と悪とを二元論的対立関係としては見ないで、相対的な関係として見るので、一人の人間が自己の中に抱え込んでいる悪（煩惱）を克服して善を実現して行くことを実践するのである。そのためには自己を深く見つめることが重要視される。仏教の実践たる禅定も念仏もこの自己を深く見つめるということの実践の一環である。

フランスの文化人類学者であるクロード・レヴィ＝ストロースはその名著『悲しき熱帯』の最後の部分でパキスタンの各地を訪問して仏教の遺跡やイスラム教の寺院周辺などを訪問して、感想を語っている。その中でイスラム教にたいする違和感、居心地の悪さについて触れている。彼はその根本的な理由をイスラム教が他者の存在を認めないあるいは認めないことによって成り立っている思想であることに求めている。「（イスラム教徒は）他者としての他者が存在するのに耐えられないのである」「イスラムの兄弟愛は非信徒に対する排除の换位命題」であるといっている。そして、このようなイスラム教に対する違和感がキリスト教に対するそれと一致することをも述べている。

また、「私が耳を傾けた師たちから、私が読んだ哲人たちから、私が訪れた社会から、西洋が自慢の種にしているあの科学からさえ、継ぎ合わせて見れば木の下での聖賢釈尊の瞑想に他ならない教えの断片以外の何を学んだというのか？」（以上は川田順造訳）とまでいつている。

仏教は縁起的世界観、人間観を有するので、自分と他者を究極的に基盤の上に同一の存在すると見なす。他者もまた、自己と同じように悩み苦しみ悲しむ存在と考えるのである。

かれらもわたしと同様であり、わたしもかれらと同様である。と思って、自分の身に引き比べて殺してはならぬ。殺さしめてはならぬ。 スッタニパータ（経集）

私は万人の友である。万人の仲間である。一切の生きとし生けるものの同情者である。慈しみの心を修めて、常に無傷害（アヒンサー）を楽しむ。 テーラガーター（長老偈）

## 8. 仏教の未来を考える

さて仏教が、ユダヤキリスト教的あるいはマルクス主義的な善悪二元論ではない、また、弱肉強食的な市場原理主義的ではない第三の道を提示することが出来るのか？ということについて考えて見たい。

以上のように仏教では迷い苦悩する存在である凡夫が、自らを向上させて最終的な覚りを完成するための道を歩むことになる。衆生と仏との間は絶対的に隔絶しているにも関わらず、両者は基本的には繋がっているということになる。それは当然にグレーゾーンというものを認めるというよりも、衆生とはこのグレーゾーンの中に行きつ戻りつしているものであるということになる。衆生は自らの抱え込んでいる迷い・苦悩を見つめることによって、その迷い・苦悩を超えてゆく道を歩もうするのである。

私は学生に対して仏教では排除の論理はないということをよく言う。正義の立場から悪なるものを排除したり、撲滅しようとはしない。このような善悪二元論的思考方法が歴史上人類にいかにも多くの疫災をもたらしたかを考えて見る時、善悪二元論とはおよそ異なった仏教的思考方法が現代社会において意義を有するとするならば、まさにその点に於いてであろう。

仏陀は一切知者と言われ、最終的に智慧と慈悲を完成した存在である。善なるものも悪なるものもすべてその中に摂めとって、善に転換させようとするのであって、正義の立場から悪を排除・撲滅しようとするものではない。阿弥陀如来はそのような智慧と慈悲の究極的な完成者である。

わが国において特に人気のある仏教彫刻に奈良興福寺の阿修羅像がある。数年前東京上野で興福寺展が開催された時、老若男女を問わず多数の人々が、この阿修羅像を観るために押し寄せ、ファンクラブまで誕生した。阿修羅は古代インドにおいて、戦いや暴力を好む一種の悪神と見なされ、仏教においては、六道の輪廻流転の境涯の一つと見なされた。猛々しい争いの境涯と位置づけられた。日本語における「修羅場」などという言葉もそこから由来している。いずれにせよ阿修羅とは猛々しい暴力的存在である。しかし、興福寺の阿修羅像はその暴力的な阿修羅が最終的には仏教に帰依して、過去の悪業を懺悔している姿である。ここにどのような悪なる存在も最終的には仏教に帰依をして、善なる存在に転じて行くことが出来るという仏教的衆生観が示されている。

有名なアングリマーラの物語や、古代インドの魑魅魍魎・妖怪の類である夜叉が最終的に仏法を護る龍神八部衆の中に位置づけられることなども同様であろう。

私は仏教がこれからの社会に貢献できる可能性はまさにこの点にあると考えている。

仏教がこれからの社会にどれだけ貢献出来るか否かは、仏教者が仏教の思想をどれだけの自覚と誇りと熱意をもって実践して行けるかにかかっていると思う。

最後に武蔵野大学の学友同僚の皆様の現在に至るまでの数々のご厚誼に心より感謝を申し上げます。